

2025年度 公立大学法人北九州市立大学特別研究推進費 実績報告書

2026年4月30日

北九州市立大学長 様

(所属・職名) 基盤教育センター・教授
(氏名) 中尾泰士

公立大学法人北九州市立大学特別研究推進費に係る研究実績について、次の通り報告します。

研究課題名	都市空間と教育：大学知のアウトリーチを通じた共有知創造の場としての社会教育施設と街場空間の再定義		
交付額	499,980 円		
共同研究者	所属・職名	氏名	役割分担等
	基盤教育センター (地域創生学群) 准教授	廣川祐司	コモンズの研究者、地域創生学群生が行う活動の指導・分析を行う
	地域共生教育センター 特任教員	矢ヶ井那津	社会教育士として、生涯学習や熊本市での先行事例との関連を分析・検討する
	地域共生教育センター 特任教員	仙波大海	地域共生教育センター教員として、学生プロジェクトとの調整や指導を行う
	基盤教育センター教授	永末康介	高大連携を進めている教員として、若年層へのアプローチとその効果の分析を行う

1. 研究の目的

大学は社会的存在であり、その知的活動を社会に還元することが現在強く求められている。また、これまで教育活動は、学校教育・家庭教育・社会教育として個別に論じられることが多かったが、今後はますます三者間の有機的な結合が必要となるだろう。この問題意識のもとで申請者らは、大学教員や学生が街に出かけ、比較的オープンな場において知的活動を市民に届ける研究活動を推進してきた(2024年度「大人の学びのコミュニティ『i-カフェ』から考える生涯学習における大学教育の役割」)。

本研究はその発展形として、公共図書館での活動に加え、市中心部にある商業施設「リバーウォーク北九州」内にオープンした書店「丸善リバーウォーク北九州」での活動を新たに加えた。社会的共通資本としての都市空間と教育(宇沢 2000『社会的共通資本』)を結び付け、街場空間を共有知創造の場として再定義することが主眼である。社会教育の文脈の中に、大学知のアウトリーチを埋め込むことで、大学と市民とが相互に刺激を与えてお互いを高め合うことを目指した。

2. 研究の方法

図書館や書店といった、比較的オープンな「場」は、人びとの孤独や孤立を防ぐ機能を持ち「あそこに行けば誰かに会える」という居場所としても機能するのではないか。そして、それは地域にとって必要なことではないか。われわれはこの仮説を立て、大学教員や学生が人と人をつなげる「リンカー」として機能する可能性を考えている。

この観点の下でわれわれが行った活動について、その概略を以下に示す：

- 佐賀県多久市立図書館（5/3）

昨年度の活動の継続として、多久市立図書館が実施した「としょかんフットパス」に学生とともに協力・参加した。当日は、一般の参加者に加えて、地元の観光協会の方や佐賀県職員、地元ケーブルテレビの同行取材もあり、地域の公共図書館が人的交流の拠点となりうる可能性を示した。

- 行橋市立図書館「リブリオ行橋」（8/3, 11/1）

8月には、図書館司書の役割を一般利用者に紹介する目的で、司書おすすめの「私の本棚」紹介やレファレンス・インタビューのデモ、11月には、テーマごとに選書した本を使ってのグループトークを行うなど、図書館のヒト・モノを活用して、参加者同士をつなげる試みを行った。

- 北九州市立中央図書館（9/23, 12/7）

9月には、図書館の蔵書を参加者が自分の観点からキュレーションして1つの本棚にまとめるワークショップを行った。作成された「本棚」は図書館内で一定期間展示され、市民の目にふれるようにしていただいた。中央図書館の職員からは、この「本棚」に選書された本の貸し出しも伸びたという報告を受けた。ある人の選書が別の人の興味関心を引くという形で、結果として人と人をつなぐ役割を果たしたといえる。

12月には、熊本大学の田中先生をファシリテータとして招き、図書館でやりたいことを参加者が自由に発想して議論するワークショップを実施した。そこで提案されたアイデアも、図書館内で展示されワークショップに参加していない人の目にも触れるようにしていただいた。

- 丸善リバーウォーク北九州店「ひらいてつながる本トーク」（10/24, 11/28, 12/19, 1/23, 2/27）

金曜日の夜という時間設定で、商業施設内の書店でのブックトーク・イベントを月1回のペースで実施した。本学教員が「テーマ本」を提示し、その本をもとに30分程度のトークをしたのち、参加者に向けて「問い」を発する。その問いに対して、参加者同士が議論するというワークショップ形式で実施した。「テーマ本」については、必ずしも事前の読書を必要としないという点が特徴的であった。5名の教員それぞれが、異なる視点や異なる手法でワークショップを展開し、バラエティに富んだ会になった。われわれにとっても、刺激を与えあう取り組みとなったと考えている。

以上のような活動実践においては、オープンな場における活動の特性上、参加者の継続的追跡が困難であった。本研究ではそのため分析対象を「活動を提供する側」（図書館職員、書店関係者、教員・学生など）に設定し、実践の蓄積による認識・行動の変容を記録・検討した。これらの活動実践の詳細とその分析結果については、2026年度中に公表予定である。

そのほか、都市空間を社会教育の文脈から活用している先行研究や他地区の事例をサーベイし、われわれの知見とした。

3. 研究成果

齋藤純一（2005）は「都市空間の再-公共化」という観点から、「都市空間を消費の空間へと純化することをやめ、商業や娯楽のための施設の間に図書館、社会人向けの大学、保育園、デイケアセンター、介助やリハビリの施設、職業紹介所・訓練所などの施設をもつけ、年齢や関心を異にするさまざまな人びとがアクセスする空間に変えていくこと」、「演劇や音楽、美術といった芸術的な活動や、署名や集会といった政治的な活動、あるいはまた教育的な活動や社会的な活動などにその街路や広場を開いていくこと」「新しい問題の発見や新しい関係の創出が可能となるように、複合性や多元性を都市の空間に取り戻し、それを多機能的な『アゴラ』として再生する」ということの可能性と重要性を述べている（齋藤純一 2005「都市空間の再編と公共性」、岩波講座「都市の再生を考える」1『都市とは何か』所収）。

個人の好みや思想傾向によってアルゴリズム的フィルターがかかり、人びとが細かく分断されてしまっているインターネット空間とはちがい、リアルな空間では自分と異質なものにさらされるといった経験を完全に失くすことはできない。それは逆に言えば、リアルな場に集う人びとが自らの視野を広げるきっかけともなりうるものである。特定の空間を特定の目的や機能に限定するのではなく、多目的性・多機能性を回復することこそが都市空間を再生する鍵でもある（ジェイコブズ 1977『アメリカ大都市の死と生』）。

ブルデューが明らかにしたように、文化資本の差がその人の趣味・趣向の違いをうみ、それが社会の階層化をもたらすとしたら（ブルデュー1990『ディスタンクシオン』）、世代をまたぐ格差の再生産や分断に対抗するためには、家庭教育や学校教育に期待することはできない。それらとは異なる立ち位置にある社会教育と社会教育施設の役割は重大である。

われわれが活動を行ってきた「場」は、広い意味で、都市空間における「文化的コモンズ」を形成している場所だといえる（佐々木秀彦 2024『文化的コモンズ 文化施設がつくる交響圏』）。そのような場所で、「市民（Citizen）」を対象として、「図書館（Library）」「大学（University）」「書店（Bookstore）」の構成員が連携し互いに交流する活動（これを「CLUB」活動と呼ぼう）は、都市の文化資本の充実と格差解消に貢献するものだといえる。

これまでの活動を通じてわれわれは、北九州市内の市立中央図書館の職員の方々、丸善リバーウオーク北九州店を運営している丸善雄松堂の社員の方々とは良好な関係性を築くことができた。以前から継続的な関係性を構築していた、「図書館流通センター（TRC）」（多久市立図書館や行橋市立図書館「リブリオ行橋」の指定管理者）の職員の方々を含め、「人と人とのつながり」が組織を超えた

連携の鍵となる。

活動を行ったことから、当初は想定していなかったような新たな人間関係が構築されていることもある。今回、丸善雄松堂の職員を介して、「ほんのれん」(<https://www.eel.co.jp/works/honnoren2>)という『『問い』から始まる読書対話ワークショップ』を学内の教職員向けに開催することができた(9/12)。また、丸善雄松堂が図書館デザインと運営を行っている別府大学の学生・教員の方々とも、オンライン読書会への参加という形で新たなつながりが生まれた(9/27, 12/20)。

そのほか、「少女とは何か？美的に読み解く」というトークイベントが、丸善リバーウォーク北九州店内で開催された(3/20)。これは、われわれの呼びかけに応じた本学教員が、研究仲間の山田萌果氏が著した『おそましさと戯れる少女たち』の出版を契機として行った対談イベントである。本学教員や学生に加え、一般の参加者も交え、アカデミックな議論が交わされた。なにより、当日は3000円を超える当該書籍が参加者によって次々と購入されていった光景が印象に残った。

このように、われわれが始めた取り組みは地域で徐々に実を結びつつある。図書館や書店といった都市空間は、異なる文化資本を持つ人びとが偶発的に交差する場として機能しうることが示唆された。特に、大学教員・学生が「リンカー」として介在することで、その交差が対話へと転化する可能性が確認された。

今後も、各「場」における「キーパーソン」の存在を大事にし、さらに新たな人のつながりを創出すべく活動を継続していく予定である。